

中世における大学を備えたもの： 自由七科，カロリング・ルネサンス，そして12世紀ルネサンス

藤 原 淳 賀

序

- I. 古代、中世、近現代という区分について
- II. 大学を備えた知的伝統
 - A. 中世に始まる大学
 - B. 自由七科
 - C. カロリング・ルネサンス
 - D. 12Cルネサンス
- III. まとめ

序

2020年度はコロナウイルス感染症によって世界中が大きな影響を受けた。世界中の多くの大学で、対面授業を行うことができず、遠隔授業が行われた。学生たちからも、授業料返還を含めた多くの主張が出された。また日本においては、政治的な観点から、学問の自由についても広く論議されることがあった。¹ 現在は、大学そのものの意義が問い直されるにふさわしい時期といつてよいであろう。

大学が生まれたのは中世においてである。中世に大学を準備した伝統は何か。大学の性質に大きな影響を与えたと考えられる伝統について本稿では論じていきたい。²

1 日本学術会議が推薦した会員候補のうちの一部（6名）が内閣総理大臣 菅義偉によって任命されなかったことから（2020.9.）マスコミに大きく取り上げられる問題となった。

2 筆者は、これ以外にも、以下の問いに答える必要があると考えている。(1)大学はど

I. 古代、中世、近現代という区分について

今日まで続く大学の歴史は中世に始まる。「中世」という語が初めて表れてくるのは14C始めである。フランチェスコ・ペトラルカ（Francesco Petrarca, 1304-74）を始めとするイタリアの人文学者たちがこの語を用いたことが知られている。³しかし「中世」という考え方が広まっていくのは17C以降である。ドイツのクロストフ・ケラリウス（Christophori Cellarii, 1638-1707）がイエナで出版した『古代・中間の時代・新しい時代に短く明確に分けられた普遍史』（1676）がその始まりといってよい。⁴ケラリウスは、この「中間の時代」を、キリスト教に改宗した最初のローマ皇帝コンスタンティヌス帝の死（337）からオスマン帝国による東ローマ帝国の首都コンスタンティノープルの陥落（1453）までとしている。⁵偉大なる古代ギリシア・ローマの文化が、1000年に亘る中間の暗黒時代を経て、14Cルネサンスによって再び開花したという彼の歴史観がそこには表れている。

17世紀後半から啓蒙主義の時代が始まる。中世の教会権威を古く蒙昧な過去として、普遍的な理性的視点から批判する。中世は悪しき暗黒の時代とみなされた。例えば本来ゲルマン人「ゴート族の」を意味する「ゴシック」は、12C後半から15Cにかけての教会建築様式として発展したのだが、「ゲルマン的で

のような性質を持ったものとして始まったのか。それは今日まで続く大学のDNAを考える上で重要であろう。また(2)大学における学問の自由の歴史はどのように始まり、どのように発展してきたのか。教皇、皇帝、王から独立した学問の自由がどの程度存在したのか。これらは今後の研究課題としたい。

3 J・ル＝ゴフ、『中世とは何か』池田健二、菅沼潤訳、（藤原書店、2005）、73。ル＝ゴフは「中世を最初に『黒く染めた』のはペトラルカ」であるという。Ibid., 26.

4 Christophori Cellarii, *Historia Vniversalis Breviter ac Perspicve Exposita: in Antiquam, et Medii Aevi ac Novam Divisa, cum Notis Perpetvis*, Editio VI, Ienae: Svmvt IO. Felicis Bielckii, CIO IO CCXX.

<http://www.mittelalterliche-geschichte.de/mahist/index.php?id=13&lang=en&tpl=3>

5 Christophori Cellarii, *Historia Medii Aevi: A Temporibus Constantini Magni ad Constantinopolim a Turcis Captam Deducta*. Ienae: Svmvt IO. Fel. Bielckii. CIO IO CCXXIX. ここではオンデマンドで印刷された紙媒体の書籍を用いた。

中世における大学を備えたもの：自由七科、カロリング・ルネサンス、そして12世紀ルネサンス

洗練されておらず醜い」という軽蔑的な語として使われていた。

19Cには中世から切り離れた形で「ルネサンス」という概念が定着していく。ヤーコプ・ブルクハルト（Carl Jacob Christoph Burckhardt, 1818-1897）の『イタリア・ルネサンスの文化』（1860）の影響が非常に大きかった。ブルクハルトはギリシア文化を非常に高く評価した。そしてそれを復興させたイタリア・ルネサンスに、「近代ヨーロッパ文化の原型」を見ていた。⁶またブルクハルト以降、ルネサンスはイタリアという枠を超え、ヨーロッパ全体に広がっていく気運として理解されていくようになっていく。

19C以降、中世という時代は、西ローマ帝国の滅亡（476）から東ローマ帝国の終焉（1453）まで、あるいはコロンブスのアメリカ大陸到達（1492）、あるいはプロテスタント宗教改革（1517）までとする考え方が定着していく。⁷

中世の終わりを東ローマ帝国の崩壊とするのは、中世の始まりを西ローマ帝国の崩壊とすることとのバランスが取れた見解であった。またローマ帝国の終焉からルネサンスが発展していったと考えると、長い暗黒時代が終わり、近代ヨーロッパにつながる偉大な古典の復興としてのルネサンスが始まったと見る事ができたので、そのような歴史観を求める人々には都合がよいものであった。実際に、ビザンチン帝国の崩壊とともに、ギリシア文化を身に付けた多くの学者たちがヨーロッパへと移動している。そのような見方をすると、ヨーロッパは、「暗黒の中世」に頼ることなく古代ギリシアの文化へとつながることができた。

中世の終わりを1492年に見るのにも理由がある。この年、レコンキスタが完成し、グラナダからムーア人を追い出し、大航海時代が始まっていくからである。1492年は明らかに新しい時代の象徴的な年であった。

また1517年を近代の始まりと見ることも可能である。ローマ・カトリック一枚岩であったヨーロッパに、プロテスタント宗教改革が亀裂を生じさせ、新し

6 ヤーコプ・ブルクハルト、『イタリア・ルネサンスの文化・下』新井靖一訳、（ちくま学芸文庫、2019）、489.

7 ル＝ゴフ、『中世とは何か』、86ff.

い時代が始まっていった。また、ここで詳細に述べることはできないが、プロテスタンティズムは、良くも悪くも、明らかに近代的、合理的な性質を持っている。カトリックの実体 (Catholic substance) に対する批判的精神 (Protestant principle), ⁸文献としての聖書への集中、個人の主体的信仰を通しての救い、実体変化ではないプロテスタント的な聖餐諸理解にそれらは顕著に現れている。プロテスタンティズムは近代の先駆けの時代精神の中で生まれていとし、また近代を牽引していった。

20世紀に入り、古代、中世、近代の時代区分が見直されていく。ベルギーのアンリ・ピレンヌ (Henri Pirenne, 1862-1935) は地中海世界の存続に注目した。西ローマ帝国崩壊 (476) の後も地中海世界を中心とするローマ的世界は存続していた。地中海世界の統一が破壊されたのは、7C以降のムスリムの侵略によってである。⁹ムスリムは、中東と北アフリカを侵略していった。これにより西ヨーロッパが地中海から離れ、内陸化されていった。¹⁰この変化を古代から中世への移行であったと見るいわゆる「ピレンヌ・テーゼ」が提出され、注目された。¹¹

チャールズ・ホーマー・ハスキンス (Charles Homer Haskins, 1870-1937) は12Cの知的発展に注目し「12Cルネサンス」について論じた。¹²前述のように、中世は暗黒時代であり、ルネサンスは14Cイタリアに始まるとし、その間の断絶が強調されていたが、ハスキンスは中世と近代の連続性を指摘する。「12C

8 Paul Tillich, *Systematic Theology*, vol. 3, (Chicago: University of Chicago Press, 1963), 245. See also Paul Tillich, *Systematic Theology*, vol. 1, (Chicago: University of Chicago Press, 1951), 37.

9 アンリ・ピレンヌ, 『ヨーロッパ世界の誕生: マホメットとシャルルマーニュ』, 中村宏, 佐々木克巳訳, 増田四郎監修, (創文社, 1968), 228.

10 H・ピレンヌ他, 『古代から中世へ: ピレンヌ学説とその検討』 佐々木克巳編訳, (創文社歴史学叢書, 1983), 3.

11 Cf. 澤田典子他, 「地中海世界における『古代』と『中世』: 西洋史学と世界史教育のあいだ」『千葉大学教育学部研究紀要』66, 2, (2018), 267-276.

12 チャールズ・H・ハスキンス, 『十二世紀ルネサンス』, 別宮貞徳, 朝倉文市訳, (みすず書房, 1997).

中世における大学を備えたもの：自由七科、カロリング・ルネサンス、そして12世紀ルネサンス

ルネサンス」については後述する（II-D 12Cルネサンス）。

ダブリン生まれのピーター・ブラウン（Peter Robert Lamont Brown, 1935-）は『古代末期の世界』（1971）において「古代末期（Late Antiquity）」という概念を発展させ、古代研究に大きな影響を与えた。¹³彼は200-700年頃（後に250年頃から800年頃と修正）は古代末期と考えられるべきであると考えた。エドワード・ギボン（Edward Gibbon, 1737-1794）が書いた『ローマ帝国衰亡史』の影響によって、中世は「古典古代」の衰退（decline）として否定的に見られていた。しかしブラウンはむしろ古代の変容（transformation）と見る。古代から数百年かけて古代末期という異なった世界が生まれ、西ヨーロッパ、東ローマ帝国、イスラーム世界が成立していった。そして中世が始まると捉えたのである。

このようなピレンヌ、ハスキンス、ブラウンの緩やかな歴史移行的理解に対し、最近では考古学資料を用いて、蛮族ゲルマン人によるローマ帝国の破壊を強調する動きや、両者を橋渡しするような研究も出てきている。¹⁴また中世の終わりを、宗教戦争が終わり、神聖ローマ帝国が実質的に解体され、新たな西欧国際体制（主権国家、国際法、勢力均衡）が始まったウエストファリア条約（1648）に見るという見方もある。

歴史とは解釈されるものであり、中世の時代区分に関しても様々な見方が成り立つであろう。専門家たちによる創造的な解釈がこれからも提出されてくると思われる。それらの流れを踏まえた上で、本稿においては便宜的に、中世を5-15C、西ローマ帝国の崩壊（476）から東ローマ帝国の崩壊（1453）あるいはコロンブスのアメリカ大陸到達（1492）あたりまでとしておく。

13 ピーター・ブラウン、『古代末期の世界』宮島直機訳（刀水書房、2016）、3。ピーター・ブラウン、『古代末期の形成』足立広明訳（慶應義塾大学出版会、2006）。

14 ジリアン・クラーク、『古代末期のローマ帝国：多文化の織りなす世界』（白水社、2015）。ブライアン・ウォード＝パーキンズ、『ローマ帝国の崩壊〔新装版〕：文明が終わるということ』、南雲泰輔訳（白水社、2020）。

Ⅱ. 大学を備えた知的伝統

A. 中世に始まる大学

大学は中世が生み出した偉大な高等教育機関であり研究機関である。このことだけ考えても、中世を暗黒の時代と考えることが適切でないことは明らかである。ここでは大学を、「高度な専門的學術の研究および教授を主たる機能」とし、「さまざまな学問分野で学位を授与する権限」を持つ「高等教育機関」と大まかに定義しておく。¹⁵

プラトン (Πλάτων, 427-347 BC) のアカデメイア, アリストテレス (Αριστοτέλης, 384-322 BC) のリュケイオンが知られているように、高等教育それ自体は古代ギリシアに既に見られる。また自由七科の源流もまたそこにある。¹⁶

しかしカリキュラム、学部、学寮、学位を備えた組織としての大学が始まるのは、12Cである。¹⁷最も古い大学であるボローニャ大学やパリ大学がいつ始まったのかを文献によって特定することはできないが、12Cと考えられている。ハスキンズがいうように、「われわれは、アテネやアレクサンドリアのではなく、パリとボローニャの相続人であり後継者」なのである。¹⁸

B. 自由七科

自由七科、自由学芸、あるいはリベラル・アーツ。これは、中世西洋の一般教育において必須とされた7学科である。文法、修辭学、弁証論の三科 (trivium) と、算術、天文学、幾何学、音楽の四科 (quadrivium) からなっている。前者は人文系の科目であり、後者は理科系の科目である。

自由七科の源は古代ギリシアのピタゴラス (Πυθαγόρας, 570頃-495 BC頃)

15 「ブリタニカ国際大百科事典 小項目版 2019 プラス世界各国要覧」。

16 ソクラテス (469BC頃-399BC) の教育、またプラトン (427BC-347BC) のアカデメイア、アリストテレス (384BC-322BC) のリュケイオンでは高等教育が行われていたといっている。Cf. 堀米庸三編、『西欧精神の探求：革新の十二世紀』（日本放送出版協会, 1980）, 244。

17 ハスキンズ、『十二世紀ルネサンス』, 305。

18 C・H・ハスキンズ、『大学の起源』青木靖三、三浦常司訳、(八坂書房, 2009), 17。

中世における大学を備えたもの：自由七科、カロリング・ルネサンス、そして12世紀ルネサンス

に遡ることができる。¹⁹ピタゴラスは「万物は数である」と考え、算術、天文、幾何、音楽という数学的主題をあげて論じた。これを自由人の知と結びつけたのはソクラテス（Σωκράτης, 469頃-399 BC）でありプラトンであった。賃金をもらう労働としてではなく、肉体労働から解放された自由人にふさわしい教養と考えた。プラトンは『国家』において、「本曲」としての哲学問答法の「前奏曲」として、数と計算、幾何学、立体幾何学、天文学、音楽理論（音階学）の教育について論じている。²⁰ここに既に自由四科の内容を見ることができる。それが一般教育（εγκύκλιος παιδεία）という全人格的一般教育として広まっていく。

ラテン語の自由七科（septem artes liberales）が、今日われわれが一般に使う英語のリベラル・アーツの語源である。紀元前1世紀のローマに、未だ7科として明確に完成してはいないが、その源を見ることができる。特にキケロ（Marcus Tullius Cicero, 106-43 BC）とその友人の百科全書的著述家ウァロ（Marcus Terentius Varro, 116-27 BC）が基礎的学科を論じている。彼らは、弁論、弁証、音楽、幾何、天文、また医術や建築といった実学もあげていたようである。上述のようにリベラル・アーツはしばしば（奴隸的な）職業的技術とは一線を画した、自由人の教養としての学芸という意味で用いられる。ローマには実践的な考えを好む傾向があったことが知られている。「ラテン的な実学を、知を愛し求める一線に連ねてしまう自由」もこの時代のリベラル・アーツにはあったようである。²¹

リベラル・アーツの7つの科目が揃って初めて現れるのは5C初頭のマルティアヌス・カペラ（Martianus Minneus Felix Capella, 生没年不詳）においてである。彼は、ローマを衰退させることになる西ゴート族のローマ略奪

19 半田智久, 「セブンリベラルアーツはどこから来た何ものか」『お茶の水女子大学人文科学研究第6巻』(2010), 158. 自由七科の歴史について簡潔にまとめられている。

20 プラトン, 『国家・上』藤沢令夫訳（岩波文庫 電子書籍版, 2017）, 第7巻6章-12章, また音楽、文芸、体育、医術教育についても語っている。（2巻-3巻）

21 半田智久, 「セブンリベラルアーツはどこから来た何ものか」, 150.

(410) の前に『フィロロギアとメルクリウスの結婚』を記している。²²これは学問論的寓意物語であり9編から成っている。最初の2編には新婦フィロロギア (Philologiae) と新郎メルクリウス (Mercurii) の結婚の様子が記されており、その後、7人の召使いが、——すなわち文法、論理、修辞、幾何、算術、天文、音楽が、——祝辞を語り自らを紹介する。建築術と医術は同席しているが、語ることはない。実学を評価していたラテン・リベラルアーツでは建築術や医術は重んじられていたが、ここでは一段低いものとして表現されていると考えられる。

ボエティウス (Anicius Manlius Torquatus Severinus Boethius, 480頃-524頃) はローマの名門アニキウス家出身の政治家、思想家であった。東ゴートのテオドリック王に仕え、首都ラベンナで宰相にまでなったが、政争に巻き込まれ、処刑されることになる。ボエティウスは、プラトンとアリストテレスの全著作をラテン語訳することを願っていたが、宰相としての働きのためにその僅かな部分しか果たすことしかできず、それも混乱の中で失われてしまっている。彼自身の著作は、カロリング・ルネサンスの指導者ヨークのアルクイン、またアベラール、アクィナスといった中世の重要な指導者を含め、多くの人々に影響を与えたといわれている。最も有名な著作は処刑を待つ中で書いた『哲学の慰め』である。²³5巻からなっており、「きわめて気品のある身なりをした婦人」²⁴ (哲学) とボエティウスとの対話として書かれている。自由七科に関しては、哲学研究に必要な4科 (算術、天文、幾何、音楽) のそれぞれについて書いたが、今日残っているのは『算術教程』(2巻) と『音楽教程』(5巻) だけである。²⁵

22 Ibid., 154-5. Cf. 慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション、インキュナブラコレクション、015 カペラ『メルクリウスとフィロロギアの結婚』。

<https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/incunabula/015>

23 ボエティウス、『哲学の慰め』チョーサー英訳、樋口晶幸訳、(広島：溪水社、1991)。

24 ボエティウス、『哲学の慰め』渡辺義雄訳、(筑摩叢書139, 1985), 9. 渡辺義雄による「解説」は有益である。

25 ボエティウスは30歳のとき (510), アリストテレスの『オルガノン』のラテン語訳に

中世における大学を備えたもの：自由七科，カロリング・ルネサンス，そして12世紀ルネサンス

自由七科の歴史において重要な人物として，ボエティウスと親しかった同時代のカッシオドルス（Flavius Magnus Aurelius Cassiodorus Senator, 490頃-585頃）をあげておきたい。²⁶彼は，西ローマ帝国の崩壊（476）後に，南イタリアのスキュラケウム（Scyllaceum）の有力な家系に生まれている。²⁷カッシオドルスの曾祖父はバンダル族のローマ略奪の時（455），南イタリアのブルティウム（Bruttium）をバンダルから守った。祖父はウァレンティニアヌス3世に仕えたが早くして引退している。父は，西ローマのロムルス・アウグストゥルス（Romulus Augustulus, 位475-6）を廃位させて西ローマ帝国を滅ぼしたオドアケル（Odiacer, 位476-93）と，オドアケルを倒した東ゴート王国（497-553）の王テオドリック（Theodoric, 位471-526）の両方に仕え数々の要職に就いている。

カッシオドルス自身も，東ゴート王国に仕え首都ラヴェンナで数々の要職に就いている。²⁸東ローマ帝国のユスティニアヌス1世はイタリアに派兵して首

取り掛かり，その全訳とそのうちの「命題論」（初心者向けの2巻と上級者向けの6巻）の注釈等を書くことができた。また「範疇論」の4巻にわたる注解を書いている。渡辺義雄「解説」，ボエティウス，『哲学の慰め』渡辺義雄訳，229-31. John Marenbon, ed. *The Cambridge Companion to Boethius*, Cambridge Companions to Philosophy, English ed., Kindle edition, (Cambridge University Press, 2009), 1. Anicius Manlius Severinus Boethius, *Fundamentals of Music*, trans. Calvin M. Bower, ed. Claude V. Palisca, (New Haven: Yale University Press, 1989). Henry Chadwick, *Boethius: The Consolations of Music, Logic, Theology, and Philosophy*, Clarendon Paperbacks, (Oxford: Clarendon Press, 1990).

26 カッシオドルスは，506年頃にボエティウスに宛てた手紙で「あなたの翻訳のおかげで音楽家のピュタゴラス，天文学者のプトレマイオス，数学者のニコマコス，幾何学者のエウクレイドスが，イタリア人によって読まれます。神学者のプラトンと論理学者のアリストテレスが，ローマ人の言葉で論争します。また，あなたは機械技師のアルクメデスをラテン語でシキリア人に返しました」と語っているという（渡辺義雄による「解説」の引用から）。ボエティウス，『哲学の慰め』，232。

27 Paul Lejay and Joseph Otten, “Cassiodorus.” ed. Charles G. Herbermann et al., *The Catholic Encyclopedia: An International Work of Reference on the Constitution, Doctrine, Discipline, and History of the Catholic Church* (New York: The Encyclopedia Press; The Universal Knowledge Foundation, 1907-1913).

28 507-11判事・財務官（quaestor），514執政官（concul ordinarius），その後，宰相。テオドリックの死後も，アタラリック（Athalaric, 位526-34），テオダハッド（Theodahad,

都ラヴェンナを陥落させる（540）。そうした騒乱の中、537年頃カッシオドルスは公職から退き、恐らく540年頃、他の人々とともにコンスタンティノーブルへと移っている。

イタリアに平和が戻った恐らく554年頃、カッシオドルスはコンスタンティノーブルを去る。ローマの多くの貴族がそうしたように、故郷の一族の領地に帰り老後を過ごすことを選んだ。既に60代半ばであった。彼が他の人と異なっていたのは、知的教養と信仰者としての情熱を持っていたことである。彼は、故郷に2つの修道院的施設を建てる。

カッシオドルスは、キリスト教を学ぶための学校を、教皇アガペトゥス1世（Agapetus I, 位535-6）と共に、嘗てローマに建てようとしたことがあったのだが、戦争のために実現できなかったと語っている。²⁹その思いがこの修道院に結実したといってよいであろう。彼はここで約30年の老後を過ごすことになる。

修道院の1つはウィウアリウム（Vivarium [養魚池]）と呼ばれ、教育と研究が行われた。³⁰水を引いた庭があり、浴場が整備され、近くには魚の豊富なベレナ川の流れがあった。その修道院で浄化された者がより高い霊性を求めることができるように、カッシオドルスはカステルム山にもう一つの修道院を作っていた。

ウィウアリウムには共住修道用の施設と図書館が作られた。かなり豊富な数の本が収集されていたと考えられている。写字生を訓練し、ギリシア・ラテン

位534-36）、ヴィティギス（Vitigis, 位536-40）に仕えている。田子多津子、「解説」、カッシオドルス、「綱要」田子多津子訳、『中世思想原典集成5 後期ラテン教父』野町啓監修、（平凡社、1993）、330。

29 カッシオドルス、「綱要」、336-7。以下も参照せよ。“I, Cassiodorus, tried to found a school of Christian learning at Rome; war interfered, so I quit politics in disgust a couple of years later and came home here to found a monastic school instead.” James J. O'Donnell, *Cassiodorus*, (University of California Press, 1979; Postprint, 1995), Chapter 6, “Vivarium.”

<https://faculty.georgetown.edu/jod/texts/cassbook/toc.html>

30 カッシオドルス、「綱要」、345-6。

中世における大学を備えたもの：自由七科、カロリング・ルネサンス、そして12世紀ルネサンス

教父の書を写本をさせている。カッシオドルスの知性は晩年まで衰えず、92歳で『正書法について』を書いている。³¹また恐らくコンスタンティノーブルで入手してきたのだと思うが、ギリシア語の書物をバイリンガルの学者たちにラテン語へ翻訳させている。³²彼の頭の中には、かつて見たローマでの古き良き時代の学校がそのイメージとしてあったと考えられる。数多くの戦乱と政治的争いを見てきたカッシオドルスは、ローマが荒らされた場合でも写本がウィウアリウムに残ることを願っていたと思われるが、残念ながらウィウアリウム写本が他の図書館に残ったという記録はない。³³彼は、単にローマ文化を保存する学術的な学校を作りたかったのではなく、霊的な修道院共同体を作りたかったのであり、彼自身そのような生活をしたかったのだと思う。

自由七科の観点から重要なのは、カッシオドルスの「聖学ならびに世俗的初学綱要 (*Institutiones divinarum et saecularium litterarum*)」(543-555)である。同書でカペラにも言及している。³⁴「綱要」は2巻からなっており、修道士の学びを助けることを主たる目的としていた。聖なるテキストを学ぶこと(第1巻)、そしてそのために必要な世俗的な学問的訓練について書かれている(第2巻)。自由七科(*septem artes liberales*)という言葉は用いていないが、神学を学ぶ助けとなる有益な学びとしてとして7つの学科をあげている。³⁵「綱

31 クラーク、『古代末期のローマ帝国』, 157.

32 オドネル(O'Donnell)は、カッシオドルスが静かな生涯に亘る修道生活を約束してMutianus, Bellator, Epiphaniusらを招いたと推測している。

33 O'Donnell, *Cassiodorus*, Chapter 6.

34 カッシオドルスは、カペラがいくつかの分野について簡単にまとめたものがあると聞いているとも記している。カッシオドルス, 「綱要」, 379. “Audiuius etiam Felicem Capellam aliqua de disciplinis scripsisse deflorata, ne talibus litteris fratrum simplicitas linqueretur ignara; quae tamen ad manus nostras adhuc minime peruenire potuerunt. Sed melius est ut nec illa uobis quandoque pereant, et ista quamuis exigua desiderantibus celeriter offerantur. Nunc ergo ad mathematicae ueniamus initia.” Cassiodorus (Flavius Magnus Aurelius Cassiodorus Senator), *Institutiones*, digilibLT 2015, III. DE DIALECTICA [20].

<https://digiliblt.uniupo.it/xtf/view?query=&brand=default;docId=dlt000078/dlt000078.xml>.

35 目次は以下のようになっている。Praefatio (序文), I. De Grammatica (文法), II. De

要」は基礎文献として書かれており、更に読むべき書が記されていた。それらの文献もウィウァリウムの図書館に所蔵されていた。³⁶

カッシオドルスは、自らの立派な経歴の中で身に付け用いてきた雄弁さ、修辭、文筆の技術の重要さをよく理解していた。³⁷彼は政治家として、支配者ゴート人とローマ人官僚との橋渡しをしてきた。また古典文化とキリスト教文化を結びつけてきた。³⁸彼はまた、コンスタンティノーブルでの経験も生かし、西と東、ラテン文化とギリシア文化の橋渡しも試みている。古典の教養を持ちキリスト教神学、文化を発展させたアウグスティヌス（Augustine of Hippo, 354-430）をカッシオドルスは高く評価していたのだが、自らも同様の試みをしていると言ってよい。こういった橋渡しの学術的試みは、大学の精神と合致するものである。騒乱の6Cのイタリア半島において、このように自由七科

Rhetorica（修辭学）、III. De Dialectica（論理学）。これらは言語の使用に関するものである。正しく、美しく説得力があり、論理的な文章が書けることを目的としている。そして IIII. De Arithmetica（算術）、V. De Musica（音楽）、VI. De Geometrica（幾何）、VII. De Astronomia（天文学）、Conclusio（結論）、音楽とは演奏ではなく、「耳で聞く数学」としての音楽理論を意味する。この「綱要」2巻全体を以下で読むことができる。Cassiodorus (Flavius Magnus Aurelius Cassiodorus Senator), *Institutiones*, digilibLT 2015.

<https://digiliblt.uniupo.it/xtf/view?query=&brand=default;docId=dlt000078/dlt000078.xml>
以下も参照せよ。

<http://www.intratext.com/IXT/LAT0482/>

36 田子多津子,「解説」, 333.

37 後にオックスフォード大学で教えるロジャー・ベーコン（Roger Bacon, 1220頃-1292頃）もカッシオドルスの四科への論述について記している。「しかるに数学については、カッシオドルスはその書において、この学問についてこう述べている。『これら四つの学問、すなわち幾何学・算術・天文学・音楽にわれわれが精神を集中して思いめぐらせるとき、それらは感覚を鋭くし、無知の汚れを拭い去り、惜しみなく与える主によって、かの思弁的な観想へと導く。正当にも聖なる教父たちは、それらを講読すべきであると説いている。なぜなら、それらによって欲望の大部分が肉体的なものから解き放たれ、豊かな心のうちにただ精神のみによってわれわれが眺めることのできるものを希求するようにさせるからである』」。ロジャー・ベイコン,「大著作」,『中世思想原典集成 精選5 大学の世紀1』(Japanese Edition) 上智大学中世思想研究所編訳監修, (平凡社, Kindle 版, 2019), (Kindle の位置No.6276-6282)。

38 クラーク,『古代末期のローマ帝国』, 154-8.

中世における大学を備えたもの：自由七科、カロリング・ルネサンス、そして12世紀ルネサンスの伝統が継承され、発展していた。

C. カロリング・ルネッサンス

カロリング・ルネサンスとは、8C末から9C初めにかけて、フランク王国カロリング王朝のカル大帝（Charlemagne, 位768-814）の指導のもとで興ったカトリック・キリスト教的文化運動である。

フランク王国では、メロヴィング朝初代国王クローヴィス（Clovis, 466頃-511）がアタナシウス派に改宗して以来、カトリック教会との関係が深くなっていた。トゥール・ボワティエ間の戦いでムスリムに勝利したメロヴィング朝宮宰カール・マルテル（Charles Martel, 686-741）の時代には、世俗の者が司教や修道院長に任命されることも起こっていた。説教ができず、狩猟に明け暮れる司教、修道院長もあり、フランク王国は教会の組織も教会の財産も利用できるようになっていた。教会は国家に仕えるような存在となっていたといってもよい。³⁹そこに起こったのが、教会改革そして正当な信仰によるキリスト教国家建設を求めたカル大帝下でのカロリング・ルネサンスである。

カル大帝は、生涯ラテン語の読み書きが決して十分ではなかった。しかし旺盛な知的好奇心を持ち、教会とキリスト教文化の復興が自らの王国のためにも必要不可欠だと考えていた。また彼はキリスト教世界の復興が自らに課せられた使命だと考えていた。

カルは、彼がいたアーヘンの宮廷学校をヨーロッパ文化の中心地とすることを望んでいた。⁴⁰古典の教養の深い多くの人々をフランク王国に集め、育て、古典文化を復興していった。⁴¹その中でも最も重要なのはヨークのアルクイン

39 佐藤彰一、『カル大帝』（山川出版社, 2017）, 66.

40 カール自身、またその妻リトガルド（Luitgard）もその妹もカールの3人の子供たちも宮廷学校で学んでいる。王国の他の指導者の子弟たちも同様であった。ジョゼフ・カルメット, 『シャルルマーニュ』川俣晃自訳, 文庫クセジュ, （白水社, 1968）, 83.

41 例えば、メッス司教アンギラム。そしてピサ出身の文法学者パウリヌスとペトルス、ランゴバルト出身のファルドゥルフとパウルス・ディアコヌス。またアングロ・サクソン人ではサンスの大同司教となるベオルンラード、カトゥルフ。アイルランド人では助

(Alcuin, 735頃-804)である。⁴²アルクインは多くの弟子を育て、またカール大帝に対しても大きな影響力を持っていく。

カールとアルクインの有名な出会いは781年3月、イタリアのパルマ(Parma)でのことである。ヨーク司教座聖堂附属学校の校長であったアルクインが、780年にローマ教皇を訪問した帰り道であった。カールはアルクインの学識を見抜き、アーヘンの宮廷学校長として招く。翌782年にアルクインは招きに応じる。そして既にイタリア、アイルランドを始めとして各地から集まっていた当時の最も優れた学者たちと共に仕事をしていくことになる。

アルクインはカロリング・ルネサンスの中心的人物となっていく。⁴³宮廷学校を整え、それに次ぐ自由学芸教育のための学校を王国の各地に作り、また国中の町や村に子供たちのための学校を作っていった。そしてキリスト教の制度を整えていった。後述するカールの「一般訓令」(789)がそれを後押しした。またカロリング小文字体、ラテン語の正しい文法を整え広めていくためにも大きな働きをした。

アルクインは786年そして790年にイングランドに行っているが、その後もフランク王国に戻り、働きを続けている。晩年(796)カールによってトゥールのサン・マルタン修道院長に任ぜられる。世俗から離れたいという思いもあったようである。しかしそこでも優れたモデルとなるような修道院学校を建て、ヨークやアーヘンでそうであったように、生徒を集め教育し、また聖書や注解書、その他の多くの書を集め、写本をさせている。これがキリスト教人文主義

祭ヨセフ、カダック=アンドレアス、カンディドゥス、ドゥンガル。また西ゴート人のテオドルフがあげられる。オイゲン・エーヴィヒ、『カロリング帝国とキリスト教会』、瀬原義生訳(文理閣、2017)、69-70。五十嵐修、『地上の夢キリスト教帝国：カール大帝の〈ヨーロッパ〉』講談社選書メチエ224、(講談社、2001)、108-9。

42 James Burns, "Alcuin," ed. Charles G. Herbermann et al., *The Catholic Encyclopedia: An International Work of Reference on the Constitution, Doctrine, Discipline, and History of the Catholic Church* (New York: The Encyclopedia Press; The Universal Knowledge Foundation, 1907-1913).

43 エーヴィヒ、『カロリング帝国とキリスト教会』、70。

中世における大学を備えたもの：自由七科、カロリング・ルネサンス、そして12世紀ルネサンス

の発展の道備えとなっていく。⁴⁴「およそ教育の手本は宮廷学校だったように、およそ修道院学校の亀鑑として万民に指されたのはトゥールのサン・マルタン寺院の付属学校だった。」⁴⁵そしてこの2つの学校の指導者がアルクインであった。アルクインは「ソロモンの殿堂の7つの柱」として自由七科の教育を行い、そのための教科書も選んでいた。カルメット（トゥールーズ大学教授）は「シャルル宮廷の文部大臣」という表現を用いているが、文部大臣という枠を超えていたといつてよい。アルクインは実践する教育者であり、また信仰者であった。アルクインは独創的な思想家というよりも過去の知的遺産を大切にしていた教育者であったと考えられている。「教えるために学ぶ（Disce ut doceas）」が彼のモットーであった。教え子たちとは長くよい関係を続けており、重要な役職についた者も少なくない。⁴⁶

カール大帝は、彼の国家理念の基本精神を記した82条におよぶ「一般訓令（*Admonitio Generalis*）」を出している（789）。⁴⁷これは、フランク王国をキリ

44 Edward Kennard Rand, *A Survey of the Manuscripts of Tours*, volume I, Text, (Cambridge, MA: The Mediaeval Academy of America, 1929), 43, 52. 聖書以外にも、アウグスティヌス、ヒエロニムス、ベアダによる聖書注解書、教会法、市民法が見られる。

45 カルメット, 『シャルルマーニュ』, 85-7.

46 “Many of his pupils came to occupy important positions in Church and State and lent their influence to the cause of learning, as the above-mentioned Arno, Archbishop of Salzburg; Theodulph, Bishop of Orléans; Eanbald, Archbishop of York; Adelhard, the cousin of Charles, who became Abbot of (New) Corbie, in Saxony; Aldrich, Abbot of Ferrières, and Fridugis, the successor of Alcuin at Tours. Among his pupils also was the celebrated Rabanus Maurus, the intellectual successor of Alcuin, who came to study under him for a time at Tours, and who subsequently in his school at Fulda, continued the work of Alcuin at Aachen and Tours.” James Burns, “Alcuin.”

47 河井田研朗, 「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』（*Admonitio Generalis*）（七八九年）の試訳」『キリスト教文化研究所年報』1-27. ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所（1979.3.）, 117-150. 河井田研朗, 「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』（*Admonitio Generalis*）（789）の注解」『福岡大学人文論叢』36, 4（2004）, 1273-1295. 1-60条は短い条文である。河井田によると、教皇ハドリウスⅠがカールに送った教会法令集「ディオニシオ＝ハドリウス（*Dionysio-Hadriana*）」に依拠したものであり、60-82条はカールの側近の聖職者によるオリジナルと考えられる。

スト教に基づいた社会にしていくという彼の意図を明確に表していた。「一般訓令」にはフランク王国をキリスト教帝国と考えるアルクインの強い影響があったと考えられている。⁴⁸この序文でカールは自らを「列王記」のユダの王ヨシユアに重ねている。⁴⁹カールは、旧約聖書をモデルにして、神から託されている国家、フランク王国を真の信仰共同体として建て上げて行こうとしていた。カールは序文で、すべての「聖職者たちと世俗権力を担う高官たち」に対して以下のように記している。「貴下たちが不断の配慮と熱心な勧告をもって、神の民を永遠の生命の牧場に導くよう勉めんことを要請し、そして亦、教会法の規定を逸脱したり、公会議の教父たちの伝承から遠ざかったり（中略）する者を待ち伏せしている狼が〔そのような者を〕見つけ出して貪り喰らうことのないようにするため、迷える羊たちを良き模範或いは励ましと言う肩車に載せて、教会の堅固な城壁の中に連れ戻すよう努力されんことを、要請する。」⁵⁰

また72条では、正しいキリスト教を広め、司教座聖堂とすべての修道院に学校を設立することを聖職者に求めている。⁵¹カール大帝の時代フランク王国には約200の司教座と700の修道院があったという。⁵²多くの修道院で写本が作ら

48 例えば、エーヴィヒ、『カロリング帝国とキリスト教会』、66。

49 河井田、『『訓諭勅令』試訳』、125。カールはまた親しい学者たちとのサークルで、ダヴィデ王という名も用いており、またアーヘンの国王の座はソロモンの玉座を模している。カールは、フランク王国を正しいキリスト教信仰へと人々を導く帝国と考えていた。エーヴィヒ、『カロリング帝国とキリスト教会』、92。

50 河井田、『『訓諭勅令』試訳』、124。

51 「聖職者は、自分の身の回りに非自由身分の子どもたちばかりではなく、自由身分の子どもたちを集めるように努めるべきである。子どもたちに、読み書きを学ばせるための学校が開かれなければならない。すべての修道院および司教座聖堂において、詩編、速記法、歌唱、計算、文法を教えること、また宗教書を正確に正すこと、というのは、神に正しい形で祈ろうと願う人がいても、本が不完全で誤りがあるために、それができない場合が生じるからである。読む場合においても、書く場合においても、あなたたちの弟子が誤った解釈に陥ることを許してはならない。もし、福音書、詩編、ミサ典書の写本を作る必要がある場合には、正確な写本を作ることできる熟達したものがこれにあたるべきである。」72条（五十嵐訳）。五十嵐、『地上の夢』、101, 116-7。ランス、トロワ、ル・マンにおける学校が特に発展した。カルメット、『シャルルマーニュ』、85。

52 佐藤、『カール大帝』、65。

中世における大学を備えたもの：自由七科、カロリング・ルネサンス、そして12世紀ルネサンス

れていった。⁵³また教会組織が整備され、典礼書が普及し、教会暦も広く実行されていった。

キリスト教における古典研究の伝統という観点から見ると、7Cブリテン島で重要な人々が現れている。北東イングランド、ジャロー修道院のベード(Bede, 673頃-735)、シャポーンの司教アルドヘルム(Aldhelm, 生年不詳-709)、そして711年にフランク王国にキリスト教を伝え、カール・マルテルによってマインツ大司教に任命された(738)修道士ウィルフリドゥス(ボニファティウス[Boniface], 675頃-764)である。彼はカール・マルテルの庇護下で宮廷学校の教育にも関わっていた。⁵⁴

カール大帝以前はイングランドの方が学校教育は優れていたようである。しかしアルクインの招聘によって、またカール大帝の熱心なキリスト教政策により、教育の中心地がフランク王国へと移ったといつてよい。⁵⁵アルクインは、イングランドではできない規模の働きがキリスト教皇帝カールのフランクではできるし、またそれが行われるべきだと考えたのであろう。

アイルランドの修道院の重要性についても言及しておきたい。アルクインはアイルランドのクロンマクノイズで大修道院長、賢者コルグ(Colgu the Wise)から学んでいたようである。またアルクインが最も親しかった友ジョセフもアイルランド人である。アルクインの後にアーヘンの宮廷学校を継いだのもアイルランド人のクレメント・スコトゥスであった。⁵⁶この時代のアイルランドの

53 例えばサン・ドニ修道院、コルビ修道院、サン・レミ修道院、サン・マルタン修道院、ライヒェナウ修道院、ザンクト・ガレン修道院など。8-9Cのフランク王国フランク王国内の修道院と司教座の写字室で、約8千の写本が制作されたと推定されている。

54 教皇グレゴリウスIIがラテン的なボニファティウスという名を与え、キリスト教化が進んでいない地域の宣教を委ねた。ボニファティウスの弟子ストウルミウスがフルダ修道院を建てている(774)。カール大帝時代に、アルクインの弟子ラバヌス・マウルスがその院長を務めた。佐藤、『カール大帝』70。

55 Hastings Rashdall, *The Universities of Europe in the Middle Ages*, vol. 1, (Oxford Clarendon Press, 2010), 274.

56 トマス・カヒル、『聖者と学僧の島』森夏樹訳、(青土社, 1997), 296. John Healy, "Abbey and School of Clonmacnoise," ed. Charles G. Herbermann et al., *The Catholic*

修道院は非常に発展しており、ゲルマン人によって破壊されたヨーロッパの文化をアイルランドの修道院が保存し、大陸に移植したと考えられている。

カールは、度重なる軍事遠征によりフランク王国の領土を飛躍的に拡大し、西ヨーロッパを統一していった。⁵⁷教皇を圧迫していたランドバルド王国を討ち（774）、自らを「フランク人の王にして、ランゴバルト人の王」と称するようになる。その後、フランク南東のバイエルンを併合し（788）、また33年かけて北東のザクセン人を征服しキリスト教化した（804）、さらにイベリア半島のイスラーム、コルドバ首長国を攻め（778）ヒスパニア辺境領を作り、遠く東方のアヴァール人を撃つ（791）。このようにしてカールは、イギリスとイベリア半島を除く、かつての西ローマ帝国地域を治めるようになった。

五十嵐によると、カールは、自らの戦いを異教徒とキリスト教徒の戦いと見ており、11Cに出てくる十字軍の思想を先取りしていた。またそれは19Cに現れる「マニフェスト・デステイニー」につながる思想といってよい。⁵⁸それは、3Cまでのキリスト教会には見られなかった、力による征服的なキリスト教であった。それはローマの国教的、そしてゲルマン的キリスト教であった。

カールには初期の頃から「聖戦思想」がみられるが、後にはアルクインの影

Encyclopedia: An International Work of Reference on the Constitution, Doctrine, Discipline, and History of the Catholic Church (New York: The Encyclopedia Press; The Universal Knowledge Foundation, 1907–1913). Elizabeth Rees, *Celtic Sites and Their Saints: A Guidebook*, (Bloomsbury Publishing, 2003), 203.

<http://www.newadvent.org/cathen/04065a.htm>

57 カール大帝は、47年の治世の中、軍事遠征しなかったのは790年と807年の2年だけであった。佐藤、『カール大帝』, 24, 58.

58 五十嵐、『地上の夢キリスト教帝国』, 60-7. また五十嵐は以下のように記している。「彼（カール）の考えによれば、フランク人は神によって選ばれた民であり、キリスト教信仰を広げ、邪悪な宗教を淘汰する義務を負っていた。カールは、国内に『平和と正義』を実現するだけでなく、異教徒を打ち破り、彼らをキリスト教に改宗させることも、自分の責務であると、強く意識していた。」Ibid., 73. Cf. Atsuyoshi Fujiwara, *Theology of Culture in a Japanese Context: A Believers' Church Perspective*, (Eugene, OR: Pickwick Publications, 2012), 244-5.

中世における大学を備えたもの：自由七科、カロリング・ルネサンス、そして12世紀ルネサンス

響もあったと思われる。⁵⁹アルクインは799年6月のカールへの手紙で、キリスト教世界の3人の指導者について記している。第一にローマ教皇（聖ペテロの代理人）。しかし、この時代の教皇レオ3世に対しては批判が強く、反乱が起きていた。この手紙の2ヶ月前に教皇は襲われ、大怪我を負っていた（799.4.25.）。第二に皇帝権の担い手（新ローマ〔東ローマ帝国〕の支配者）。しかし、東ローマ帝国皇帝コンスタンティヌス6世は母イレネによって、廃位させられ（797.8.15.）両目を潰されており、ローマの皇帝位は空位となっていた。そして第三はカールだという。この二者が機能していない現在、キリスト教会の安泰はカールにかかっていると語っている。⁶⁰

これが、翌800年クリスマスの教皇レオ3世によるサン・ピエトロ寺院でのカール戴冠へと繋がっていく。⁶¹カールはカトリック教会を保護し、フランク王国をキリスト教国として整えていく使命を感じていた。戴冠の仕方に関しては不満はあったかもしれないが、カールは、ローマ帝国の統治者の地位を自らが担うものとして喜んで受け入れたと考えられている。⁶²こうしてかつての西ローマ帝国の革新（*Renovatio imperii Romanorum*）が起こった。これが神聖ローマ帝国のさきがけとなる。

7Cに生まれたイスラームは激しい侵略を行っていく。東ローマ帝国を攻め、また北アフリカを侵略し、誕生から約100年後の711年にはイベリア半島を侵略していく。

59 アルクインは796/797の手紙で初めて「キリスト教帝国（Imperium christianum）」という語を用いている。エーヴィヒ、『カロリング帝国とキリスト教会』, 92.

60 Ibid., 97.

61 佐藤彰一、『カール大帝』, 85-6.

62 アインハルトの『カール大帝伝』「カールは、皇帝位（皇帝という名称 *nomen imperatoris*）に嫌悪を感じていたので、もし彼が教皇の意図を事前に察知していたなら、彼は尊ぶべき祭日にもかかわらず、教会へいくことはなかったであろう」エーヴィヒ、『カロリング帝国とキリスト教会』, 101. からの引用。カールは自らをしばしば「フランク人の王にして、ランゴバルト王、そしてローマ人のパトリキウス」と自称している。Cf. 五十嵐修、『『帝国』のゆくえーカールの皇帝戴冠（800年）直後のフランク・ローマ・ビザンツ―』東洋英和大学 人文・社会科学論集, 21, (2004), 1.

東ローマ帝国への侵略の結果、知識人が亡命した先は主にイタリアであった。⁶³そのため、7-9Cのローマでは東方のキリスト教の影響が強くなる。⁶⁴東方からの亡命者たちはギリシアの文化をローマに伝え、ギリシア語からラテン語へ翻訳された写本が作られていくようになる。8C中頃にはギリシア語、ラテン語で多くの写本ができていた。これもこの時代の文化的発展の重要な側面である。文化と文化が出会うところに新しい発展が生まれていく。それまで知られていなかった高度な文化的遺産が翻訳され、知られていくことで、文化人を刺激し、新たな文化が生まれていくのである。イタリア半島とシチリアにはギリシア文化の影響があった。それは後に12Cルネサンスにおいても開花していく。

カロリング・ルネサンスは、カール大帝の神政的な統治政策に対応した文化運動であった。正しい礼拝、聖書理解の向上のためにラテン語の文化を復興させ、宮廷学校、修道院学校、司教座聖堂学校で教育を行い、ラテン語が中世西欧の共通語になっていった。また古典の収集と写本がカロリング小文字体で行われていくようになった。

カール大帝の帝国は短命であり、したがってカロリング・ルネサンスも短命であった。またカロリング・ルネサンスは、14Cルネサンスのように独創的な芸術作品をもたらしたわけではない。にもかかわらず、西欧文化、ラテン文化はこれをマイルストーンとして発展しており、次の時代の文化的発展の道備えをしていった。

D. 12Cルネサンス

カロリング・ルネサンスは中世の学校を整えた。アルクインが指導した自由七科は長く用いられていた。特に、文法を基礎として聖書を正しく学び、魂の救いへと向かうための教育（神学）が重んじられていた。教育は、教会の強い

63 特にギリシア文化を持つシチリアやベネヴェント公国（570-1077）。

64 例えばローマにおける東方系の修道院の数は6から11へと倍増している。佐藤彰一、『カール大帝』、68。

中世における大学を備えたもの：自由七科、カロリング・ルネサンス、そして12世紀ルネサンス

影響力の中で行われていた。

12Cには、大きく分けると3つの学校が存在していた。大聖堂附属学校、修道院学校、そして世俗の専門的学校である。大聖堂附属学校と修道院学校はアルクインの時代から続いていた。修道院では、将来聖職者となる子供たちのための教育が寄宿学校で行われ、またそれ以外の子供たちのための教育が通学学校で行われていた。

世俗の学校はイタリアにしか見られなかった。アラビア文化の影響のあったサレルノでは医学校が10C末から発展しており、科学知識の中心地となっていた。古代ギリシアの医学が論じられ、解剖や外科も行われていた。⁶⁵また地中海沿岸では法律学校も生まれていた。

12C初頭には全体として教育は衰退していた。地方にあった修道院学校では教師も生徒も集めることが困難であった。活動的な大聖堂附属学校は都市にあり、また活動的な修道院学校も都市にあった。⁶⁶

「12世紀ルネサンス」という言葉を用いたのはチャールズ・ホーマー・ハスキンスが最初ではない。しかしこれは彼によって広められた概念である。⁶⁷それまでは、中世は暗黒時代であり、ルネサンスは14Cイタリアに始まるとされ、暗黒時代とルネサンスの断絶が強調されていた。

ハスキンスは『十二世紀ルネサンス』において中世と近代の連続性を指摘し、12Cにおける古典復興の2つの側面を指摘した。⁶⁸一つはヨーロッパ内にあったラテン語文献の再発見（4-7章）であり、もう一つは、ヨーロッパでは失われヨーロッパ外で保存されていた、古代ギリシア語文献およびアラビア語

65 ジャック・ヴェルジェ、『中世の大学』、大高順雄訳（みすず書房、1979）、3。

66 Ibid., 5-7. 例えば、ボローニャのサン・フィリーチェ、またパリのサン・ヴィクトル、サント・ジュヌヴェイヴ、またラン、ランス、オルレアン、トゥール、シャルトルである。アンセルムがいた時のラン、アルベリックがいた頃のランスは神学が有名であった。

67 野口洋二、「訳者あとがき」、ハスキンス、『十二世紀ルネサンス』、376。

68 Cf. 小澤実、「訳者解説 十二世紀変革論の現在」、ジャイルズ・コンスタブル、『十二世紀宗教改革』高山博、小澤実、図師宜忠、橋川裕之、村上樹樹訳（慶應義塾大学出版会、2014）、425；朝倉文市、「解説」、ハスキンス、『十二世紀ルネサンス』、339。

文献のラテン語への翻訳である（9-11章）。それが「大学の誕生」（12章）を準備していったと考えている。筆者はこの見方を基本的に支持している。

またハスキンズは、14Cルネサンスが文学を中心としていたのに対し、12Cルネサンスは哲学と科学を中心としていたと見ている。⁶⁹しかしこれに対して、12Cに重要な宗教的な要素があったことが指摘されている。⁷⁰11-12Cにはグレゴリウス改革があった。⁷¹また「ベネディクトの戒律」という西洋修道院の基本精神への立ち返りは「12C宗教改革」と呼ばれることもある。⁷²カトリック教会内の改革運動は、16Cの「プロテスタント宗教改革」だけではなく、その前から何度も行われていた。こういったハスキンズを補う議論が行われていることは指摘しておきたい。

12世紀はまた十字軍によってイタリアの地中海商業が発展したことによる経済的發展と自由な都市の發展が見られた。また時に都市は自治権を持ち、職業的ギルドが生まれて来る。⁷³これが自由に移動する教師と学生を生み出し、教師と学生のギルドとしての大学の出現を用意していく。この時代にイベリア半島とイタリアにおいて、イスラーム文化との接触があった。ギリシア語、アラビア語からの翻訳事業が非常に大きく発展したことによって文化が飛躍的に発展した。大学はそのような中で生まれてきたのである。

大翻訳時代

ヨーロッパにおいて古代ギリシアの伝統が失われたのに対し、東ローマ帝国においては生きていた。その伝統は、アルメニア語、ゲルジア語、コプト語と

69 ハスキンズ、『十二世紀ルネサンス』、233.

70 野口洋二、「訳者あとがき」、ハスキンズ、『十二世紀ルネサンス』、381, 383.

71 堀米庸三、「グレゴリウス改革：ヨーロッパの精神的自覚」、堀米庸三編、『西欧精神の探求：革新の十二世紀』（日本放送協会、1980）、86-103.

72 コンスタブルは、11-12Cに頻繁に使われていた「レフォルマティオ（reformatio）」は教会、帝国、社会全体について用いられていた語であり、「現在使われる『ルネサンス』ほど、文化や世俗面に限定されるようなニュアンスはな」く、「宗教生活と宗教制度をも内包していたこと」ことを指摘している。コンスタブル、『十二世紀宗教改革』、4, 431.

73 ヴェルジェ、『中世の大学』、16-18.

中世における大学を備えたもの：自由七科，カロリング・ルネサンス，そして12世紀ルネサンス

いった東方教会の中で生き続けていた。また7Cには征服者ムスリムによって吸収され，また発展されていった。ムスリムは，メソポタミア，シリア，エジプトといった主要地域を征服しており，その文化的遺産を消化し，自らのものとしていた。⁷⁴「イスラムの土壌でイスラムの理解をもって，古典ギリシア文化が継続」していたのである。⁷⁵そのギリシアの伝統，そしてそのアラブ的發展が，翻訳を通してヨーロッパにもたらされたのが12Cである。12Cは「大翻訳時代」と呼ばれる。その中心地はかつての西ゴート王国の首都トレド（イベリア半島）と，シチリア・南イタリアであった。ヨーロッパは，その南西と南東で新しい文化に出会うことになる。

イベリア半島は711年にムスリムに侵攻されて以来1492年にレコンキスタを完成させるまで，ムスリムの影響下にあった。しかしトレドは，1085年，カスティリア＝レオン王アルフォンソ6世（Alfonso VI, レオン位1065-1109, カスティリア位1072-1109）によるキリスト教側の再征服により，王国の政治，文化の中心となる。トレドは，キリスト教とイスラム教の学術的交流の中心地となっていく。ベネディクト派のトレド大司教ライモンドゥス（Raymond of Toledo [Raymond de La Sauvetat], 1125-1152）とタラゾナ（Tarazona）司教ミカエルの庇護のもと12世紀に入ってから翻訳作業が進められていった。⁷⁶キリスト教徒，ムスリム，ユダヤ人がこの翻訳作業を担っている。イスラーム世界で保存されていた豊かな古代ギリシアの文献がアラビア語からラテン語へと翻訳されていく。トレドは翻訳の中心地となる（トレド翻訳学校[Escuela de Traductores de Toledo, Toledo School of Translators]）。ライモンドゥスは，

74 Cf. リチャード・E. ルーベンスタイン，『中世の覚醒：アリストテレス再発見から知の革命へ』小沢千重子訳（筑摩書房，2019），42。

75 David C. Lindberg, *The Beginnings of Western Science*, 2nd ed., (University of Chicago Press, Kindle, 2007), 174.

76 トレドでのアラビア語からラテン語への翻訳の関心が見られるのは1130年代以降である。Charles Burnett, “The Coherence of the Arabic-Latin Translation Program in Toledo in the Twelfth Century,” *Science in Context* 14 (1/2), (2001), 250.ライモンドゥスの主たる関心事は教会の改革であった。

宗教も民族も問わず、最良の人材を用い、しかも内容についてキリスト教的検閲行わず、哲学、科学の翻訳を行わせていた。⁷⁷17Cガリレオの宗教裁判とは異なる空気がここにはあった。これらの研究がキリスト教の真理と矛盾するなどとは考えなかったのであろう。その後アルフォンソ10世（Alfonso X, 1221-1284）も翻訳を強く推進していく。ハスキンスは、「スペインからこそ、アリストテレスとそのアラビアの注釈者の哲学、自然科学は到来したのであって、それが十三世紀のヨーロッパ思想をがらりと変貌させることになる」と記している。⁷⁸占星術（応用天文学）、数学、幾何学、代数学、医学、錬金術が西ヨーロッパに伝えられていった。古代ギリシアの知的伝統は、イスラームからの翻訳を通してキリスト教世界に広がり、キリスト教の知的先駆的存在としても理解されていく。

シチリアは、ユスティニアヌス1世（Justinianus I, 483-565）による拡張時代にビザンティン帝国の支配下に置かれる。シチリアと南イタリアは長い間ビザンティン帝国の一部であった。更にはコンスタンスII世（Constans II, 630-668）はビザンティン帝国の首都をシチリアのシラクサに移している（663）。これらの地域にはギリシア語を話す者がおり、東方との交易も継続していた。例えばアマルフィーは豊かに栄えており、ユスティニアヌスI世が編纂させた古代ローマ法の『学説彙纂』（533）の写本がアマルフィーにあった。それが11Cにピサへと持ち込まれ、それが更にボローニャにもたらされ、ボローニャで法学研究が栄えていくことになる。⁷⁹

77 ルーベンスタイン、『中世の覚醒』, 46.

78 ハスキンス, 『十二世紀ルネサンス』, 242. Ibid., 40, 239ffも参照せよ。哲学、数学、論理学、天文学、医学の翻訳が行われていった。初期には、バルセロナ、タラゴナ、セゴビア、レオン、パンプロナ、またトゥールーズ、ペジエ、ナルボンヌ、マルセイユでも翻訳が行われていた。

79 三成美保, 「中世ローマ法学——註釈学派と注解学派」2015, 「1060年ころ、ピサ人たちが、ビザンツのアマルフィから学説彙纂の最古の手写本をピサにもちかえった（ピサ写本、のちのフィレンツェ写本）。1070年ころには、ピサ写本の手写本がボローニャにとどき（ボローニャ本、または通俗本とよばれる）、法学研究がはじまる。これを『ローマ法学の復活』とよぶ。」 https://ch-gender.jp/wp/?page_id=1955

中世における大学を備えたもの：自由七科、カロリング・ルネサンス、そして12世紀ルネサンス

7Cに起こったイスラームは北アフリカとイベリア半島を侵略する。アフリカとヨーロッパの間に位置するシチリアもイスラームの支配下に置かれた(902-1091)。200年近いムスリムの支配の後で、ロジェール I 世 (Roger I, 1031-1101) によるノルマン人の征服が起こる (1091-1194)。そこにはイスラーム文化が残っていた。アラビアの医者、占星術師もシチリアのノルマン王国宮廷で仕えており、ギリシア語、アラビア語、ラテン語が用いられていた。そのような環境の中、ロジェール I 世もその子シチリア王ロジェール II (Roger II, 1095-1154) もラテン語への翻訳を熱心に奨励しており、多くのギリシア語文献が翻訳されている。⁸⁰シチリアは最も大きな異文化交流の中心地、また翻訳センターとなった。

12Cの大翻訳時代の特徴を3つあげておきたい。第一に古代ギリシアの文化が翻訳を通してヨーロッパに入ってきた。それはヨーロッパにおいては長く失われていたが、ビザンティン帝国においては保持され、また東方教会の伝統の中で生き続けていた。また7C以降ムスリムによって吸収され発展していたものである。

第二に、古代ギリシア文化がアラビア文化の中で発展したものが、まずヨーロッパ南西のイベリア半島を経てアラビア語からの翻訳を通して西ヨーロッパに入ってきた。その後ヨーロッパ南東のシチリア・南イタリア経由で入ってきた。この二箇所が大翻訳時代の中心地であった。

シチリア・南イタリアではギリシア語から直接ラテン語に翻訳がなされるようになった。アラビア語からの翻訳の価値はある意味で下がる。しかしアラビア数字にしても、様々な用語にしても、たとえばalgebra (代数), zero (ゼロ), algorism (計算法), alcohol (アルコール) にしても、科学の用語はアラビア文化に負っていた。⁸¹また、アラビアにおいて発展していた古代ギリシア文献の注釈や手引書も高く評価されていた。

80 ハスキンス、『十二世紀ルネサンス』、237-8, 244-7. 1091年のノルマン人によるシチリアの征服は十字軍の始まりと考えられている。Cf. ルーベンスタイン、『中世の覚醒』、50ff.

81 ハスキンス、『十二世紀ルネサンス』、244.

第三に、大翻訳時代に、古代ギリシアおよびイスラームの合理的、実証的な精神がヨーロッパにもたらされた。哲学、数学、天文学、医学、神学がこの時代にもたらされた領域であり、それがこの時代の関心事であった。これが大学を生み出していく土台となっていく。

ここに見られないのは、文学また歴史といった領域である。これが14Cルネサンスと異なる12Cルネサンスの精神である。したがって大学が生まれてくる時に文学や歴史は教育としても研究としても行われていなかった。⁸²大学における文学研究は、しばらく後に一般教養教育の中で行われていくことになる。

Ⅲ. まとめ

大学という高度な教育、研究機関が生まれる準備をしたのは、第一に、古代ギリシアに源流を見ることができる教育（自由七科）であり、諸学校であった。それらは古代、中世初期を通して継承されていた。

第二に、8-9Cのカロリング・ルネサンスが大きな支えとなった。ゲルマン人に滅ぼされた西ローマ帝国が一応の安定と統一感を持ってくるのはカール大帝（Charlemagne, 742頃-814）の時代である。ヨーロッパをカトリック・キリスト教で統一すべく尽力したカールのもとで、アルクインの教会改革とラテン語での教育が浸透していく。

第三に、12Cが経験していく知的復興があった。今日それは「12Cルネサンス」と呼ばれる。ビザンティンが保持していた古代ギリシアの文献、また7Cに興ったイスラームが吸収、発展させた古代ギリシアの知的遺産が、イベリア半島と、その後南イタリア・シチリアを通してヨーロッパに急激に入ってくる。

更に12Cの経済的な発展と自由な都市の発展が人々の移動を可能にした。自治権を持つ都市も生まれ、職業的ギルドが生まれてきた。研究や教育のために

82 Ibid., 251-253.

中世における大学を備えたもの：自由七科、カロリング・ルネサンス、そして12世紀ルネサンス

故郷を離れ、学生や教師がギルドを形成し学び教えるという環境が生まれてくる。また発展した社会が、教養のある人々を必要とした。人里離れた修道院とは異なり、大きく自由な都市は人々を惹き付け、また収容する施設も持っていた。大都市パリ、また交通の要所ボローニャで大学が生まれていく。教育はすべてラテン語で行われていたため、人々はヨーロッパのどこに行ってもその共通語で学ぶことができた。そして自由七科を超えたより高度な学問が発展していく。大学は、翻訳センターであったトレドやシチリアでは始まらなかった。大学は自由な都市で始まっていったのである。

大学は自然発生的に始まっており、いつ始まったのかを文献によって明確に特定することはできない。パリにおいては神学研究が中心となり、古代ローマ法が再発見されたボローニャにおいて法学研究が中心として行われ、また医学研究が行われていった。教会は神学を必要とし、裁判は法学を必要とし、病院は医学を必要とした。それらが大学で教えられる3つの科目となっていく。文学が大学で扱われるようになるのは、それらの3つの学問の基礎教育としての人文学部においてであり、しばらく後のことになる。自然発生していった大学を、時の教皇、また皇帝が認可し、またその後には意図的に大学を建設していくようになる。

「アテネがエルサレムに何の関係があるのか」とテルトゥリアヌス（Tertullianus, 155頃-220頃）は問うた。すなわち理性と信仰の関係、学問と啓示の関係の問題である。断絶しているのか、まったく同じなのか、何らかの継続性があるのか。

アウグスティヌス（Augustine of Hippo, 354-430）は、その回心が近づいていた時、求道の思いを持ってシンプリキアヌス（Simplicianus, 生年不詳-400）を訪れた。⁸³シンプリキアヌスは、アウグスティヌスがプラトン派以外の哲学

83 アンブロシウスが洗礼を受ける時に父的役割を果たし、またアンブロシウスの死後、ミラノの司教となる。F. L. Cross and Elizabeth A. Livingstone, eds., *The Oxford Dictionary of the Christian Church*, (Oxford, New York: Oxford University Press, 2005), 1515.

に触れなかったことを喜んだという。⁸⁴プラトンの哲学はキリスト教信仰の準備となると考えられていた。しかしアウグスティヌスは、プラトン派の哲学が彼にもたらした影響（傲慢な僭越）と聖書がもたらした影響（謙虚な告白）についても記している。⁸⁵17Cにパスカル（Blaise Pascal, 1623-1662）は神を経験した時（1654.11.23.）、「炎。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神。哲学者や学者の神にあらず。确实、确实、直感、喜び、平安。イエス・キリストの神」と書き記している（メモリアル）。20Cにティリッヒ（Paul Tillich, 1886-1965）は存在論を重んじた哲学的神学者であったが、それを否定する。「パスカルに抗して私は言う。アブラハム、イサク、ヤコブの神と哲学者の神は同じ神である。」⁸⁶

理性と信仰、学術と啓示の問題は今日でも継続している。哲学者の神とアブラハムの神。神を経験した者にとっては、このふたつが全く同じということはいえないだろう。しかし、溢れんばかりに降り注いできた古代の学術的思考の豊かな遺産に出会ったヨーロッパの知性が小躍りしてそれを吸収し、彼らのキリスト教との整合性を求め、統合していったことは十分に理解できる。ヨーロッパの知はここでそのような段階を経験する。そしてそれはスコラ学として発展していく。大学はこのような文脈で生まれていったのである。大学における研究は知を総合していくものであり、神学研究においては、理性と信仰のデリケートなバランスを探りながら進められていくことになる。

84 シンブリキアヌスは、アウグスティヌスがプラトン派以外の書に触れなかったことを喜び、他の哲学者たちの書物は『『この世の浅い知恵に従って』、虚偽と欺瞞に満ちているが、かのプラトン派の書物はあらゆる仕方でも神とその信仰に導くもので』『神とその御言が暗示されている』と語っている。アウグスティヌス、『告白II』山田晶訳（中央公論社, 2018）, 80-82; アウグスティヌス、『告白（上）』服部英次郎訳（岩波書店, 2006）, 247-8.

85 アウグスティヌス、『告白II』山田晶訳, 66; アウグスティヌス、『告白（上）』服部訳, 238. 7巻20章.

86 Paul Tillich, *Biblical Religion and the Search for Ultimate Reality*, (Chicago: The University of Chicago Press, 1955 [Kindle, 2010]), 85.

中世における大学を備えたもの：自由七科、カロリング・ルネサンス、そして12世紀ルネサンス

引用参考文献

- アウグスティヌス. 2006. 『告白（上）』服部英次郎訳. 岩波書店.
- _____. 2018. 『告白II』山田晶訳. 中央公論社.
- アリストテレス. 2018. 『ニコマコス倫理学 上・下』高田三郎訳. 岩波文庫 電子書籍版.
- 五十嵐修. 2001. 『地上の夢 キリスト教帝国：カール大帝の＜ヨーロッパ＞』. 講談社選書メチエ224.
- _____. 2004. 『「帝国」のゆくえ：カールの皇帝戴冠（800年）直後のフランク・ローマ・ビザンツ』『東洋英和大学 人文・社会科学論集21』. 1-22.
- _____. 2010. 『王国・教会・帝国：カール大帝期の王権と国家』知泉書館.
- 池谷文夫. 2019. 『神聖ローマ帝国：ドイツ王が支配した帝国』刀水書房.
- ヴェルジェ, ジャック. 1979. 『中世の大学』大高雄雄訳. みすず書房.
- ウォード＝パーキンズ, ブライアン. 2020. 『ローマ帝国の崩壊〔新装版〕：文明が終わるということ』南雲泰輔訳. 白水社.
- エーヴィヒ, オイゲン. 2017. 『カロリング帝国とキリスト教会』瀬原義生訳. 文理閣.
- カルメット, ジョゼフ. 1968. 『シャルルマーニュ』川俣晃自訳. 文庫クセジュ. 白水社.
- 河井田研朗. 1979. 「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』（Admonitio Generalis）（七八九）の試訳」『キリスト教文化研究所年報』1-27. ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所. 117-150.
- _____. 2004. 「カロルス大帝の『万民への訓諭勅令』（Admonitio Generalis）（789）の注解」『福岡大学人文論叢』36, 4. 1273-1295.
- カヒル, トマス. 1997. 『聖者と学僧の島』森夏樹訳. 青土社.
- キーン, モーリス. 1992. 『ヨーロッパ中世史』橋本八男訳. 芸立出版.
- クラーク, ジリアン. 2015. 『古代末期のローマ帝国：多文化の織りなす世界』白水社.
- 児玉善仁. 2007. 『イタリアの中世大学』名古屋大学出版会.
- コンスタブル, ジャイルズ. 2014. 『十二世紀宗教改革：修道制の刷新と西洋中世社会』高山博監訳. 慶應義塾大学出版会.
- サザーン, R. W. 2007. 『西欧中世の社会と教会：教会史から中世を読む』上條敏子訳. 八坂書房.
- 佐藤彰一. 2009. 『中世世界とは何か』岩波書店.
- _____. 2017. 『カール大帝』山川出版社.
- ザッカニーニ, グイド. 1990. 『中世イタリアの大学生活』児玉善仁訳. 平凡社.
- 澤田典子他. 2018. 「地中海世界における『古代』と『中世』：西洋史学と世界史教育のあいだ」『千葉大学教育学部研究紀要』66-2. 267-276.
- 島田雄次郎. 1990. 『ヨーロッパの大学』玉川大学出版部.
- ジェラルド, A. 1995. 『ヨーロッパ中世社会史辞典』池田健二訳. 藤原書店.
- シャルル, クリストフ, ジャック・ヴェルジェ. 2010. 『大学の歴史』岡山茂, 谷口清彦訳. 白水社.
- 高山博. 1999. 『中世シチリア王国』講談社現代新書.

- 田子多津子. 1993. 「解説」. カッシオドルス. 「綱要」田子多津子訳. 『中世思想原典集成 5 後期ラテン教父』野町啓監修. 平凡社.
- ディルセー, ステファン. 1988. 『大学史 (上)』池端次郎訳. 東洋出版社.
- 出村彰. 2005. 『中世キリスト教の歴史』日本キリスト教団出版局.
- 野口洋二. 2000. 「訳者あとがき」ハスキンス, チャールズ・H. 『十二世紀ルネサンス』野口洋二訳. 創文社.
- ハスキンス, チャールズ・H. 1997. 『十二世紀ルネサンス』別宮貞徳, 朝倉文市訳. みすず書房.
- _____. 2009. 『大学の起源』青木靖三, 三浦常司訳. 八坂書房.
- 半田智久. 2010. 「セブンリベラルアーツはどこから来たものか」『お茶の水女子大学人文科学研究第6巻』. 149-160.
- ピレンス, アンリ. 1968. 『ヨーロッパ世界の誕生：マホメットとシャルルマーニュ』中村宏, 佐々木克巳訳. 増田四郎監修. 創文社.
- ピレンス, H. 他. 1983. 『古代から中世へ：ピレンヌ学説とその検討』佐々木克巳編訳. 創文社歴史学叢書.
- フェルテン, フランツ. 2010. 『中世ヨーロッパの教会と俗世』甚野尚志編. 小山寛之訳. 山川出版社.
- ブラウン, ピーター. 2006. 『古代末期の形成』足立広明訳. 慶應義塾大学出版会.
- _____. 2016. 『古代末期の世界』宮島直機訳. 刀水書房.
- プラトン. 2017. 『国家・上』藤沢令夫訳. 岩波文庫 電子書籍版.
- ブルクハルト, ヤーコブ. 2019. 『イタリア・ルネサンスの文化・下』新井靖一訳. ちくま学芸文庫.
- ペイコン, ロジャー. 2019. 「大著作」『中世思想原典集成 精選5 大学の世紀1』(Japanese Edition) 上智大学中世思想研究所編訳監修. 平凡社. Kindle 版.
- ボエティウス. 1985. 『哲学の慰め』渡辺義雄訳. 筑摩叢書139.
- _____. 1991. 『哲学の慰め』チョーサー英訳. 樋口晶幸訳. 広島：溪水社.
- 堀米庸三編. 1980. 『西欧精神の探求：革新の十二世紀』日本放送協会.
- マクニーリー, イアン・F, ライザ・ウルヴァートン. 2010. 『知はいかにして「再発明」されたか：アレクサンドリア図書館からインターネットまで』富永星訳. 日経BP.
- 三佐川亮宏. 2018. 『紀元千年の皇帝：オットー三世とその時代』刀水書房.
- 横尾壮英. 1992. 『中世大学都市への旅』朝日新聞社.
- _____. 1999. 『大学の誕生と変貌：ヨーロッパ大学史断章』東信堂.
- ル=ゴフ, J. 2005. 『中世とは何か』池田健二, 菅沼潤訳. 藤原書店.
- _____. 2014. 『ヨーロッパは中世に誕生したのか?』菅沼潤訳. 藤原書店.
- ルーベンスティン, リチャード・E. 2019. 『中世の覚醒：アリストテレス再発見から知の革命へ』小沢千重子訳. 筑摩書房.
- 三成美保. 2015. 「中世ローマ法学——註釈学派と注解学派」
https://ch-gender.jp/wp/?page_id=1955

中世における大学を備えたもの：自由七科，カロリング・ルネサンス，そして12世紀ルネサンス

横尾壮英. 1999. 『大学の誕生と変貌：ヨーロッパ大学史断章』 東信堂.

- Boethius, Anicius Manlius Severinus. 1989. *Fundamentals of Music*. Trans. Calvin M. Bower. Ed. Claude V. Palisca. New Haven: Yale University Press.
- Burnett, Charles. 2001. "The Coherence of the Arabic-Latin Translation Program in Toledo in the Twelfth Century." *Science in Context* 14 (1/2). Cambridge University Press. 249-288.
- Burns, James. 1907-1913. "Alcuin," Ed. Charles G. Herbermann et al., *The Catholic Encyclopedia: An International Work of Reference on the Constitution, Doctrine, Discipline, and History of the Catholic Church*. New York: The Encyclopedia Press; The Universal Knowledge Foundation.
- Cassiodor. 2003. *Institutiones divinarum et saecularium litterarum. Einführung in die geistlichen und weltlichen Wissenschaften I/II/* Trans. Wolfgang Bürsgens, Herder.
- Cellarii, Christophori. CIO IO CCXX. *Historia Vniversalis Breviter ac Perspicue Exposita: in Antiquam, et Medii Aevi ac Novam Divisa, cum Notis Perpetuis*, Editio VI. Ienae: Svmv IO. Felicis Bielckii.
- _____. CIO IO CCXIX. *Historia Medii Aevi: A Temporibus Constantini Magni ad Constantinopolim a Turcis Captam Deducta*. Ienae: Svmv IO. Fel. Bielckii.
- Chadwick, Henry. 1990. *Boethius: The Consolations of Music, Logic, Theology, and Philosophy*, Clarendon Paperbacks. Oxford: Clarendon Press.
- Cross, F. L. and Elizabeth A. Livingstone, Eds. 2005. *The Oxford Dictionary of the Christian Church*. Oxford, New York: Oxford University Press.
- Dales, Douglas. 2012. *Alcuin: His Life and Legacy*. James Clarke and Co.
- De Ridder-Symoens, Hilde. Ed. 2003. *A History of the University in Europe: Volume 1. Universities in the Middle Ages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fujiwara, Atsuyoshi. 2012. *Theology of Culture in a Japanese Context: A Believers' Church Perspective*. Eugene, OR: Pickwick Publications.
- Healy, John. 1907-1913. "Abbey and School of Clonmacnoise." Ed. Charles G. Herbermann et al. *The Catholic Encyclopedia: An International Work of Reference on the Constitution, Doctrine, Discipline, and History of the Catholic Church*. New York: The Encyclopedia Press; The Universal Knowledge Foundation.
- Lejay, Paul, and Joseph Otten. 1907-1913. "Cassiodorus." Ed. Charles G. Herbermann et al. *The Catholic Encyclopedia: An International Work of Reference on the Constitution, Doctrine, Discipline, and History of the Catholic Church*. New York: The Encyclopedia Press; The Universal Knowledge Foundation.
- Lindberg, David C. 2007. *The Beginnings of Western Science*. 2nd Ed. University of Chicago Press. Kindle.
- Marenbon, John. Ed. 2009. *The Cambridge Companion to Boethius*, Cambridge Companions

- to Philosophy, English ed. Kindle edition. Cambridge University Press.
- O'Donnell, James J. 1995. *Cassiodorus*. University of California Press [1979]; Postprint.
<https://faculty.georgetown.edu/jod/texts/cassbook/toc.html>
- Rand, Edward Kennard. 1929. *A Survey of the Manuscripts of Tours*, volume I. Text. Cambridge, MA: The Mediaeval Academy of America.
<https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=mdp.39015020077379&view=1up&seq=7>
- Rashdall, Hastings. 2010 [1895]. *The Universities of Europe in the Middle Ages. Volume 1: Salerno, Bologna, Paris*. Cambridge University Press.
- _____. 2010. *The Universities of Europe in the Middle Ages. Volume II, Part II: English Universities-Student Life*. Cambridge University Press.
- Rees, Elizabeth. 2003. *Celtic Sites and Their Saints: A Guidebook*. Bloomsbury Publishing.
- Ridder-Symoens, H. Ed. 2003. *A History of the University in Europe. Volume 1. Universities in the Middle Ages*. Cambridge University Press.
- Tillich, Paul. 1955 [Kindle, 2010]. *Biblical Religion and the Search for Ultimate Reality*. Chicago: The University of Chicago Press.
- _____. 1951. *Systematic Theology*. Vol. 1. Chicago: University of Chicago Press.
- _____. 1963. *Systematic Theology*. Vol. 3. Chicago: University of Chicago Press.